
財閥連合/ダーク・クロニクルズ

黑夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

財閥連合ノダーク・クロニクルズ

【Nコード】

N6902R

【作者名】

黒夜風

【あらすじ】

世界最大の民間企業・財閥連合の裏の年代記。それは世間には公開されることなく封印される。ドリームストーンとサイエンネットを中心に行われたのは暗殺計画。それは決して世間には公開されなかった。

星曆1982/計画(前書き)

最初に言っておきますがこれはフィクションです

星暦1982/計画

星暦1943年、国際政府の支配する地、コスーム大陸にて一つの民間企業が誕生した。その名は「財閥連合」

当時、世界最大の富豪と称されていたクロア・パネルが総帥の地位である総督の地位に就任し、企業は25年で世界最大の民間企業に成長した。

だが、いつ頃からだろうか？ 財閥連合は裏で違法とされる遺伝子実験を始め、更には生物兵器の開発。私設テロ組織と称し、強大な警備軍を編成した。

強大な軍事力を持った財閥連合を当然の事ながら国際政府は警戒を始めた。しかし、創業停止に追い込まれる事はなかった。

その理由は国際政府の政治機関である元老院の内部に財閥連合と繋がりのある人間が多数いたからである。

そんな間にも闇の研究と開発は進んで行く。

——星暦1982年、テトラルフォレスト・ラスガン支部

テトラルシティの郊外にあるテトラルフォレスト。その山中に財閥連合の研究所であるラスガン支部があった。

この研究所でもやはり遺伝子実験や生物兵器の開発が行われ、一般に公開できない物が数多く存在した。

「トロイア、ハミック、グラントル」

「何ですか？ トゲボム博士」

白衣を着た若い二人の男と一人の女性。また彼らと同じように白衣を着た杖をついた老人。

若い男がトロイアとハミックで女性はグラントル。老人はトゲボムであった。

「今朝、クロア・パネル総督から“ドリームストーン”の開発は中止しろと命令がきた」

「それはつまり長年トゲボムが行ってきた研究を止めろという事ですな？」

トロイアが言う。トゲボム、トロイア、ハミック、グラントルは“ドリームストーン計画”の中心人物であった。

特にトゲボムは長年行ってきただけに内心、この命令を受け取れないでいた。だが、この命令を無視すればパネルに暗殺される。絶対に。

財閥連合発足当時は二人三脚でお互い頑張り、苦楽を共にしてきたトゲボムとパネルだった。

が、しかし、近年では財閥連合内での権力闘争でお互いを殺そうと思い始め、殺害のチャンスを狙っていた。

「トゲボム博士はいいんですか？」

「ふっふっふ…… まさか、な」

「しかし、命令を受けないと消されてしまいます！ 私はトゲボム博士が死ぬのはイヤですよ！！」

グラントルはトゲボムに詰め寄って言った。

「まあ落ち着けグラントル…… ワシは大きな“味方”を得ようとしている」

「味方ですか？ 誰です？」

「彼はこの“ドリームストーン”に強い興味を示してくれたのだ」

ドリームストーン――

それは財閥連合発足当時からトゲボムが開発を始めた物であった。

使い方によっては大量のエネルギーを生む物である。

また、ドリームストーン内にある無限のエネルギーを使い、ドリームストーン自体を爆弾として起用すれば大都市一つを消せる程だった。

そして、それを生物体内に取り込み、うまく融合すれば不老不死かつ無敵の存在になるという。

トゲボムが行っている研究はこの生物とドリームストーンとの融合であった。

「もう、お前達に教えてもいいだろう…… 三日後にパネルを暗殺する」

「……………！？」

「なあに、“味方”がいれば必ず成功するさ」

目を丸くして驚くハミツク達を見て、トゲボムは不気味な笑みを浮かべたのだった。

だが、トゲボムの知らない所で“これ”とはまた別の暗殺計画が動いていたとは知る由も無い。

星曆1982/計画(後書き)

星曆は誤字ではありません

星暦1982/暗殺

【コスーム大陸 クロア邸】

財閥連合総督クロア・パネル。彼の私邸はコスーム大陸東、ティト山脈にあった。

財閥連合最高権力位総督のパネル閣下とは名ばかりで業務は基本部下に任せ、重要な判断のみを行っていた。

そんな彼には一つだけ恐れている事があった。財閥連合での地位を失うことではなく、またこの組織の崩壊でもない。

それは生ある者が必ず受け止めねばならない事で、避けて通れぬ事であった。――死。

パネルの恐れるのはいつか来るであろう自らの人生の終わりである死。それを恐れていた。

巨大民間企業財閥連合。世界最大の大富豪であった彼がそれを立ち上げたのも不老不死の薬を開発する為であった。

「よし、わかった。……勿論だ」

パネルは受話器を置く。電話の相手は誰だったのか？ 館の外で鳴り響いた雷が彼の顔を照らす。口元を歪め笑っていた。

その姿は側にいたSP（護衛官）の目に映っていた。

――星暦1982年12月16日 暗殺計画実行日

トゲボムはトロイア、ハミック、グラントルの信頼する3人を連れてクロア邸に行った。

パネルは何も知らないのか、笑顔で彼を迎える。

「いやあ、君が研究中止命令を素直に受け止めてくれて有りがたい」
「いえ、総督閣下直々の命令ですからなあ」

「今後君は財閥連合の宣伝部の幹部に任命するよ…… 年取った君にはそれがいいだろう」

宣伝部の幹部――

ドリームストーン計画の主任研究員の地位と比べれば天と地の差であつた。

この命令を受理すればトゲボムは完全に権力闘争に負けた事を意味する。

「勿論、受理するよなあ……」

この時、グラントルは服に忍ばせていたマグナムを密かに取り出していた。それにパネルは気づかない。

パネルのSPもそれに気づかず、トゲボムの方ばかり見ている。

「……アンタが死んだら命令は無効だな」

「何ッ!? 貴様ア!」

突然の発砲音。それと共に床に赤い血が水玉状に散り、彼は床に崩れるように倒れる。まさに高い地位から転落していくようであった。

死はやってくる―― それは突然の人もあれば少しずつ近づいてくる者もある。彼の場合は突然やってきた、が当てはまるだろう。

「よくやった。グラントル。これでもう邪魔者はいない」

「有難う御座います。コレも全てアナタの為です」

「邪魔者が消えたおかげでより命令が発しやすくなった。S Pの君にも礼を言おう…… 君のおかげでより作戦が順調に進んだ」

パネルの側に控えていたS Pがニヤリと笑う。

「彼はバカな男でしたな。この私を味方だと思っていたようで……」

そのS Pは肉塊と化した男を足で仰向けにする。頭に開いた穴からどす黒い血と異臭が流れ出る。

それを見て、S Pの男はまたニヤリと笑う。

「よし、今後は我が財閥連合の絶対的最高権力者だ。中立だった連中も我に従うだろう。

今回の功績をもってグラントルをドリームストーン計画の主任研究員とする」

グラントルは一礼をする。そして、絶対的最高権力者になった“彼”に礼を言った。

「有難う御座います。“クロア・パネル” 総督閣下」

しばらく死んだ“トゲボム”を見ていたS Pの男は再び口を開く。

「トゲボムのヤツは暗殺計画をしようと言ったら喜びましたよ…… 誰の暗殺計画かも言っていないのに……」

「暗殺計画とは“トゲボム暗殺計画”だったのにな」

「これで邪魔者はいない。約束通り、全員の地位を上げ、また給料や援助金もいままでの倍にしてやろう」

嵐が吹き荒れ、雷が鳴り響くティト山脈。その中に立つのはクロア・パネルの館。

そこで行われた“暗殺計画”は成功した。トゲボムの考えていた暗殺計画とは違った暗殺計画が――

トゲボムに味方はいなかった。信頼していたグラントルやハミツクらにも裏切られ、その生涯を終えた。

勝者であるパネルやグラントルらは笑う――

だが、この暗殺計画も“あの男”のとある計画の一つでしかなかったとはパネルやグラントルらには知る術もなかったのだった。

星暦1995 / 仲間

—— 星暦1995年 12月

あの暗殺計画から13年もの月日が経過した。あの嵐の夜、彼らは間違いなくお互い協力し合っていた。

だが、今やそんな関係ではない。ハミックとトロイアはドリームストーン計画に変わる“新たな計画”を始めたのだ。

その為、パネルは彼らの暗殺を考え始めた。パネルにとってドリームストーンは自らの死を消す最も有効な手段だった。

その計画を止め、別の研究を始めた人間にもはや用は無い。だが、トロイアとハミックは大きな権限を有している。

そのまま放置しておくのは危険。そう考えたからパネルは暗殺計画を考え始めたのだ。

一方、グラントルは長年共に研究してきた仲間を殺したくなかった。だから彼らが“新たな計画”を始める前、何度も引き止めた。

—— 星暦1995年 2月

【テトラルシティ テトラル支部】

“それ”はトロイアが突然、言い出した。

「ドリームストーン計画に変わる新たな計画を考え出した」

「新たな計画？」

「“サイエンネット計画”だよ」

「サイエンネット？」

「これはドリームストーンと違いコストの面で非常にいいのだ」

ドリームストーンは使い方が多く、小さな物だった為持ち運びに便利で非常に優れた物だった。だが問題が一つだけあった。

それはおカネだった。一個のドリームストーンを生産するのに莫大な費用がかかった。しかも、パネルの考える不老不死かつ無敵の存在になるには十個のドリームストーンが必要だった。

一個ですらおカネがかかり過ぎるのに十個となれば財閥連合が破綻してしまう。現在生産した個数は6個。これが限界であった。

「で、サイエンネットとは何？」

「人工ウイルスさ。これは一体でも体内に入ればその生物は不老不死かつ無敵になれる」

トロイアはサイエンネットについて詳しく語った。だが、グラントルにはそれは全く理解できず、また到底現実にはなりそうもない物だった。

だが、トロイアは、いや、トロイアとハミックはそれが頭から離れなくなった。そして同年6月にはドリームストーン計画から分離すると言い出した。

「何故、長年の研究をここで止めるの？」

「アレはもう無理だ。すでにコストがかかりすぎている」

「だから僕達はサイエンネット計画を始めるのさ」

「パネル総督は許可しないよ…… 絶対に」

「だろうね。でもあの老いばれもそろそろ寿命だろ」

結局、グラントルには彼らを引き止めることは出来ず、最悪な結末に向かって動き出す。

【テトラルシティ テトラル支部】

大切な研究仲間を失って以来グラントルは孤独に耐えながら研究を行い続けた。だが、以前のように研究ははかどらず同じような日々を繰り返していた。

そんな彼女の元に以前の仲間が訪れた。言うまでもなくトロイアとハミックだった。不思議なのは財閥連合の特殊部隊も一緒だったということぐらいだろう。

「やあ、グラントル」

「ハミック、久しぶりね！ どうしたの？ いきなり現れて」

「ふふふふ…… 僕らは“とある人”の協力でサイエンネット計画を始める事にしたんだ」

「サイエンネット……」

グラントルはサイエンネットの名を聞いてガツカリする。自分を訪ねてきたのはドリームストーン計画に戻ってきたかと思ったのだ。

「今日来たのは君に死んで頂こうと思ってね……」

「……えッ？」

ハミックが右手を上げる。コレが合図なのだろう。側に控えていた特殊部隊の兵士はアサルトライフルの銃口をグラントルに向け、発砲する。

コンピューターの画面は音を立てて割れ、壁には無数の穴が開く。そして、床や壁にあの夜と同じように水玉状に赤い血が散る。

「ガッ！ ハ、ハミックッ！」

「遺言は？」

「こ、殺さないで！ まだ……死にたくない！！」

ハミックは無言でマグナムの引き金を引いた。銃口から飛び出た弾は回転しながら一直線に飛び、グラントルの胸を貫いた。

「ハ……ハミック……」

ドリームストーン計画主任研究員のグラントルはあっけなくこの世を去った。

この事件によってドリームストーン計画という死を免れる計画は途絶えることになる。

そして、この事件もまた“あの男”の計画の内であった。

星暦1995/病死

—— 星暦1995年 12月16日

【テイト山脈 クロア邸】

この頃、パネルの体調は優れず日を追うことに悪化する。そんな彼の元にある男が尋ねてきた。

その男はほとんど黒一色の服装で不気味な感じであつたがパネルが信頼している人間の一人でもあつた。

「おお、パトフォーではないか…… ゴホッ！」

だるく重い体を起こして“昔の部下”の訪問を喜ぶ。パトフォーと呼ばれた男は軽く一礼してパネルの側に寄る。

「今日はあの夜からちょうど13年だな…… あの時のお前がまさか国際政府の元老院議長になるとは……」

「ええ、私も予想外でしたよ…… 13年前、私はアナタのSPでしかなかったのですから」

この男、パトフォーは13年前、トゲボム暗殺計画に加担していたあのSPだったのだ。

あの事件の後、選挙で財閥連合は一人の男を推薦した。それがマグフェルト・パトフォー。彼は財閥連合の力で元老院議員となった。だが、その後、パトフォーは何の支援もなく元老院議長の位に昇り、国際政府内で大きな権力を有したのだった。

どのような方法を使ったのかは財閥連合幹部はおるかパネルですら不明であり、知っているのは本人だけなのだろう。

「それにしてもよく来てくれた…… もう、ワシは長くない」

「ほオ、死をあんなに恐れたアナタからそんな事を発するとは……」

「ふっふっふ…… ドリームストーン計画もトロイアのいうサイエ
ンネット計画ももう間に合わん。」

この止められぬ老いという名の病はワシを殺す。最後にあの思い
上がりのトロイアを消したかったがそれも叶わん」

パネルは赤いワインをグラスに注いでパトフォーに渡す。パトフ
オーはそれを受け取り、窓に写る景色を見ながら口に入れる。

外は13年前とは違い、灰色の空から白い雪がしんと降り注
ぐ。ティトの山々は白い世界に変わっていた。

「結局、財閥連合という巨大組織はワシの救済組織となる事はなか
った」

「後、一步でしたのに…… アナタの無念は私が引き継ぎましょう」

「ふっ、若造が…… だが、後継者を決めねばなるまい。もうワシ
の命はあと僅か」

「全権は誰が引き継がせるつもりですか？」

雪が降り積もり、ティト山脈の木の枝はその重みで折れそうにな
る。

「財閥連合の権力は分散させる……」

「……………」

「財閥連合のメインコンピューター・オーロラの管理権は息子のコ
マンドとワシが信頼しているネストールとティルに」

「ネストールとティルはまだ若いですが…… 大丈夫ですかな？」

「心配ない。彼らは財閥連合に対し誰よりも忠誠を誓っている……」

パトフォー、お前よりもな」

片手に赤色のワインの入ったグラスを持ち、外の景色を見ていたパトフォーは振り返り、パネルを見る。

彼はコンピューターを操作していた。恐らく、メインコンピューター・オーロラの管理権やその他の色々な事を入力しているのだろう。

「そして、総督の地位はコマンドに……」

「私はどうなるのですかな？」

「心配するな。お前にはオーロラの管理権を与えないが大総督の地位を与える」

「大総督？」

「総督の上の地位だ。陰からコマンドをサポートしてやってくれ」

「……わかりました」

コンピューターの操作を終えるとパネルは再びベッドに横になる。パトフォーはグラスを置く。中には僅かに赤いワインが残るだけだった。

「ふっふっふっふ…… ワシの死は徐々にやって来る死であつたか

……」

それだけを言い残すとパネルは目を瞑り、静かに息を引き取った。

—— クロア・パネル。

民間企業・財閥連合の創始者でその組織を創った目的は不老不死という人類最大の夢を実現する為であつた。だが、その夢半ばで彼はこの世を去る。

そして、彼の夢は全く違った形でこの世界に大きな衝撃を与えることになる。ドリームストーンとサイエンネットが世界を混乱の極みに導く。

星歴2002/真実

パトフォーはパネルの部屋から廊下に出る。そして、振り向きもせずクロア邸から外に出て雪の中を歩く。

彼は“とある計画”を進めていた。13年前のトゲボム暗殺計画も元はと言えば彼が言い出したものののだ。

そして、最近では密かにトロイアとハミックにグラントルを殺させ、サイエンネット計画を進めるように命じた。これも全て自分が世界を永久支配する為。

雪降るティト山脈の森を歩きながら、彼は別の計画を考えていた。トロイア、ハミック、コマンド、ネストール、ティル、オーロラ……誰をどのタイミングで消すか、誰が味方とするのか？ 今後どのように動いていくのか？ パトフォーの頭でそんな考えが動いていた。

やがて、その考えは現実になっていく。パネルとは違い、考えを現実にする。それがパトフォーだった。

——星歴2002年 5月

【財閥連合・氷覇支部】

パトフォーの前にひざまずくティル。一応、財閥連合のリーダーはパトフォーであった。世間一般にはコマンドがリーダーとされていたが。

「……全ての隠蔽工作は行っている。お前達は軍を率いてテトラルシティを占領しろ」

「はい、閣下。お任せを……」

テイルは何も疑わずいつものように命令に従う。だが、この命令はパトフォーにとって邪魔なテイルを消す作戦だったなんて知る由も無い。

そして、その数日後だった。元老院議長マグフェルト・パトフォーの命令によって核ミサイルがテトラルシティに飛んだのは――

【テトラルシティ】

「ミサイル攻撃を確認。総員直ちに退避せよ。ミサイル攻撃を確認。総員直ちに退避せよ」

「はッ！！？ バカな！ まだ私が残っているではないか！ どういう事だ！！」

テイルはパソコンがある所まで走っていく。だが、パソコンは戦闘の影響で壊れたのか全く動かない。

それでもテイルは必死で連絡と取ろうと色々試す。だが、ムダであつた。

その間にも核ミサイルはテトラルシティ内に入り中心地を目指して猛スピードで飛ぶ。

「くッ！ 大暗黒帝の野郎オ！！」

そう空中に向かって叫んだ直後彼は見た。飛んで行く核ミサイルを。そして、一瞬にして、テトラルシティ消滅した。

パトフォーはあの日、つまりパネルの死から大暗黒帝と名乗った。そして、財閥連合内で権力を増やし、今や最高権力者となっていた。大暗黒帝と名乗ったのは国際政府や市民に財閥連合との関わりがバレるのを防ぐ為だ。

彼はオーロラの管理権を持つ邪魔な存在であるティトをテトラルシティもろとも消したのだ。

国際政府の元老院議長の権力と財閥連合大総督という権力。この二大権によってティルを消したのだった。

また、トロイアとハミックはテトラルシティが消滅する前にパトフォーに対し、反乱を起こした。あのサイエンネットを独占しようとしたのだ。

パトフォーは普通の民間人であったレストルやその他数名を利用し、トロイアとハミックを殺す。これもまた彼の計画の内だった。

*

このテトラルシティで起きた事件を含め、これまでパトフォーが行ってきた闇の事件は全て闇に封印された。

国際政府も市民も知らない財閥連合の闇の歴史、ダーク・クロニクルズ。このクロニクルズの封印が解かれるのはまた後の話である。ただ不思議なのはこのクロニクルズの封印を解き、世界に晒したのはあの財閥連合の最高権力者だった。

その行動は一体何を意味するのか？ 何故、封印したダーク・クロニクルズを自らで世界に晒したのか？ それはパトフォー本人にしか分らないであろう。

「ククク…… 全て計画通りだ」

『財閥連合ノダーク・クロニクルズ 完結』

星歴2002／真実（後書き）

最後まで読んで下さって有難う御座いました！

この小説の続編もまた書いていくと思いますのでその時は宜しくお
願いしますね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6902r/>

財閥連合/ダーク・クロニクルズ

2011年4月10日23時51分発行